

小水城跡

小水城（「小さな水城」の意）は、664 年に築かれた長さ 1.2 キロの土塁である主郭の水城とほぼ同時期に築かれた土塁である。併せて、博多湾の南に広がる平野部（間もなく大宰府が築かれる予定）への外敵の侵入を防ぐ大きな壁として機能することを意図したものである。

小規模な水城は、主郭の水城の西側の山裾に築かれ、主郭と比較すると低く、短く、幅も薄かった。その役割は、主郭の水城を西へ向かって迂回しようとする軍勢が出入りする可能性のある低地の河谷を塞ぐことであった。現在のこの地は後年の開発によって整地され平らになっているが、7 世紀には小水城の両端は高い谷壁に囲まれていた。

大土居水城

大土居水城は川に垂直に築かれ、土塁の両側には自然の高台がそびえていた。その長さは 110 メートル、高さは 7 メートルほどであった。博多湾に面した北側には、幅 40 メートルの濠があった。大土居水城と主郭の水城の水路は構造的に類似していることから、両水城は一貫した防衛企図の一環として築かれたものと考えられる。

天神山水城

天神山水城は、太宰府の中心部から最も離れた堡塁で、現在では春日市の住宅地となっている

地に築かれた。長さ 140 メートル、高さ 5 メートルほどであったが、濠の幅はわかっていない。何層にもなる土製の壁は地中に地層を残しており、その地層が露出して道路から容易に視認できる場所もある。